

AAスクールの元教師が実感する“グローバルなコミュニケーション”とは

これからの国際化に求められる「意味の建築」という視点

連 健夫 連健夫建築研究室

「意味の建築」というと何か分かりにくい感じがするが、建築を物理的なハードな建物として見るのではなく、文化・芸術を含めたソフトなものとして捉える視点と考えると分かりやすい。建築の捉え方として技術、芸術、生産の三要素があるが、日本の場合は、この中で技術と生産の視点が強いような気がする。これは、建築学科の多くが工学部に属しているため、自然科学の範疇からの価値観がベースとなっているので無理は無い。しかし国際化という意味からは、この価値観だけではコミュニケーションができない場合もでてこよう。表層的なコミュニケーションではなく、がっちりとかみ合う議論の中で、何かを生み出す創造的コミュニケーションのためには、より幅の広い建築観として「意味の建築」の視点が必要だと思ふ。海外で体験した建築家教育を通して、その視点を考察したい。



写真1：ロンドンの中心、ベッドフォードスクエアに面する校舎

必要だと思ふ。海外で体験した建築家教育を通して、その視点を考察したい。

プロセスとコンセプトを大切に建築家教育

胃の手術がきっかけでゼネコンを辞め、91年から96年までロンドンにあるAAスクールという建築学校で学生、教師として過ごした(写真1)。この学校は、150年の歴史を持つ学校でありながら、前衛的かつユニークな建築家教育で知られている。卒業生には、リチャード・ロジャース、ナイジェル・コーツ、レム・コールハースなど日本にも馴染みのある建築家がいる。

この学校で驚かされるのは、学生の建築作品が、結果のみの建物ではなく、プロセスを中心とした多様な建築ということである。私が学生として、最初に経験した課題は、「朝早く

駅に行き、気になる人を見つけて尾行し、その人と都市との関係を記録し、考察しなさい」という内容で、徹夜も設計する建物の内容も与えられなかった。とまどいながらも、服飾学校の学生を尾行し、調査、分析する中で、身体の空間という自分のテーマを設定し、自分の体の型や表面積を採取するなどの探求をして、最終的に、スーツケースとジャケットを製作した(写真2)。半年の課題で、教師のアドバイスの基で、私なりに全力投球したプロジェクトである。しかし、日本で建築教育を受け、仕事をした私には、なぜこれが建築なのかという疑問が生じた。他の学生の作品も、「匂い」「夕日」「隙



写真2：身体の空間をテーマにした作品。建築の意味は多様である。



写真3：課題の途中、何度も話し合いがあり、学生は進捗状況(プロセス)を説明する。(手前：C.プライス、右：筆者)

間」など様々なテーマで、多様なプロセスを経て、建物のみならず、音楽、靴、料理など多彩な作品となっている。これは、建築の意味を建物だけではなく、幅広く捉えていることに他ならない。考えて見れば、バウハウスにおけるグロピウスの言葉に「建築の傘下にすべての芸術がある」、アリストテレスは「語学を探索して統合するのが建築家である」と述べた。そこに、建築が様々なものを包括するカテゴリーであることが認識できる。

さて、それではその多様な作品の評価軸はどのようなかという疑問が生じてくる。近代建築がベースとなった日本の多くの設計課題では、与えられた敷地に建てるべき建物の内容が示されており、敷地の有効利用、明快な動線計画、構造的解決など、スキル（技術的な視点）をもとに結果が評価されるが、この場合は、その一義的な評価は通用しなくなる。ここでは結果のみならずプロセスとの関係で評価がなされる。作品の評価軸は、そのプロセスが独創的で、かつ深みがあるか否か、コンセプトから成果物にダイナミックに変換がなされているか、という点が開問される。すなわち、「プロセスが建築に意味を与え、成果物を評価するときの視点を示す」のである。これは考えて見れば納得がいく、多様な作品が、教師の一義的な視点で評価されてはたまったものではない。

セドリック・ブライスの助手として指導していた時に、感じたのはコンセプトの大切である。早く形にしたがる私の指導に対して、氏から学生のコンセプトをできる限り深めよと指示され、このことを思い知らされた。コンセプトに至るまでのプロセスに独創性と深みがあり、力強いコンセプトになっていればそれ自身が作品になりうる。この場合、その表現は、コラージュ、オブジェ、インスタレーションなど芸術的なものになる。この多様な表現はAAのみならず、他の欧米の大学にも見られる傾向である。この1つの理由は、建築が建築

学部として存在していることである。講評会などで、科学と芸術の狭間の議論、更には政治、経済、哲学など様々なことが学生の作品を通して交わされる（写真3）。この中で建築理論が練られる。つまり、建築の意味が論じられ、結果として建築家のモラルを育ててきている。形にするスキルのみを育ててもモラルに繋がらない。要はバランスの問題である。

近代建築以後において、形が重要視される日本では、ポストモダニズムの多様な建築とくくりに説明されがちであるが、欧米では建築の意味に視点があるため、60年代の文脈を大切にしたコンテクスチュアリズム、70年代のヒエラルキーを取り去るというデコンストラクティビズム、物語性に重きを置いた80年代のナラティブ、90年代の社会的アプローチなど、様々な理論が生み出されている。これらの多様な考え方が講評会でも作品のコンセプトを通じて、論じられる。日本の建築学科の講評会で、学生が様々な試みをしているにも関わらず、あいかわらずスキルのみでものを捉え、評価をしないどころか、自分の狭い建築観を押し付けている姿を見て、悲しくなることがある。国際化とは、多様な建築を理解する度量が必要で、建築の意味を議論する態度が必要であろう。理論が分からずとも、プロセスから評価軸を得ること、コンセプトの質を読み取る姿勢ぐらいは、少なくとも必要なのではないかと考える。

96年に帰国後、設計実務の傍ら海外にてワークショップを続けている。「パナキュラー（地域性・土着性）の変換」をテーマにしているが、これも「建築の意味」の探求である（写真4）。文化を背景としたソフトな視点における議論は、今後の国際化におけるコミュニケーションにおいて、相手の文化、多様な建築を理解する意味で益々大切になると感じている。



写真4：96年のインドでのワークショップ。現地建築家の協力は不可欠である。パナキュラーを調査し、提案する。



連 健夫 (65才)

1956年京都生まれ。多摩美術大学卒業、東京都立大学大学院修了。建設会社勤務。91年渡米、AAスクール大学院留学、AA大学院修士学位取得の後、同校助手、東ロンドン大学非常勤講師。在英日本大使館技術顧問。96年帰国し、(有)連健夫建築研究室を設立し設計実務の傍ら、明治大学非常勤講師など教育に関わる。作品に尾張屋、ツリーハウス、すげんの家など。著書に「イギリス色の街」技藝堂などがある。